工学院大学主催

第９回　高校生の建築フレッシュ・アイデア・コンペ

文の部門　優秀賞

「故郷を共有する家」

東京都立工芸高等学校　石田千夏さん

故郷を共有できる家

震災やまちの再開発など、何らかの理由で故郷に住むことが出来なくなった人。引っ越す際、今まで住んでいたまちに愛着がある人。そんな人の為に、日常の居住空間とは別にもう一つの生活空間を設けることによってそこに住み続けられる「共有できる家」を提案する。

1.　はじめに

「住む」とは、常にある領域で生活することである。しかし、「住み続ける」という言葉にはもっと意識的な面があると私は思った。

たとえば、近所の人たちと仲が良い人がいたとする。その人が、もしその場所を引っ越してしまったとしても仲良くしていた近所の人たちの心の中には、その人が記憶として意識的にその場所に住み続けることになるのではないか。また、引っ越しをした人がもと居た土地の文化や風土に良さを感じ、少しでも愛着を持っていれば、その愛着は「住み続けたいと願う心」なのではないか。と考えたからだ。私は、その気持ちを形として表したいと思う。

2.　提案内容と効果

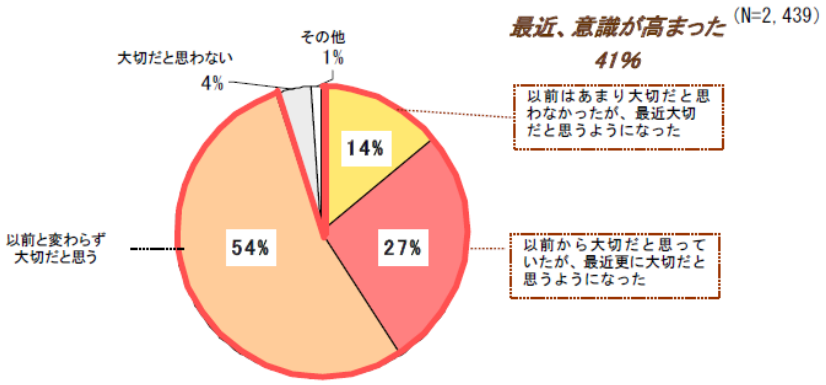
住み続けたいなら引越しをしなければいい。と思うかもしれないが、人には様々な理由があって引越しを決めるのだと思う。簡単に辞めたり、引っ越しを繰り返したりできるわけではない。

私が第二の居住空間と聞いて思い浮かべるものは別荘だった。別荘となるような物件を調べると、空き家の情報も出てくる。空き家は、なぜ空き家として残っているのか。その理由も出てきた。その中に「自分は遠方に住んでいるため、相続などで親からもらった家に住むことは出来ない。しかし、自分の育った家に愛着があり壊したくない。」と書かれていた。これは、前で書いた「住み続けたいと願う心」を持っていても、住むことが出来ない例だと思う。このような、同じ気持ちを持つ人が集まり、そのような理由で理由で残っている家を利用すれば、惜しむ気持ちは解消され、意識的な面で想う土地に住み続けることが出来るというものだ。

人口の流出により過疎化少子化が進む地方の地域にとって、少しでも土地に愛着を持ってくれる人は貴重である。それでも出て行ってしまう人に、この家を故郷への気持ちのつながりとして利用してもらう。そうすれば、ホームシック、結婚、仕事など様々な理由でまた戻ってきてくれるかもしれない。戻ってきた時に、わからないことが少なくなり困ることが減る。

最大のメリットは、「共有できる家」を利用している人、その家のご近所の人、互いに他の土地に住居を置いていても、知り合いが増えることだ。震災後、首都圏の居住者の41％の人が住民同士のつながりやコミュニティへの意識が高まり、95％の人が大切だと思っている。（グラフ①.長谷エアーベスト「ＷＥＢアンケート」2011 年 9 月より）これは、何かあった時に助け合える仲が重要だと感じた人が多くいたということだ。震災時には、他の離れた土地に住む知り合いが居れば一時的な避難や多くの手助けをしてもらえる様になるはずだ。

■ 震災後、住民同士の繋がり・コミュニティが「大切だと思う」意識は変わりましたか？　（グラフ①）



住民同士の繋がりが「大切だと思う」:95%

長谷エアーベスト「WEB アンケート」2011 年 9 月より

さらに、別の土地へ移住した被災者に対してのアンケートで「近所付き合いがうまくいっていない」ことが問題点としてあげられていた。

そこで、この家が普及すれば、別の土地でも風習や特徴など色々な情報を知ることが出来るコミュニケーションの場になる。「よそ者」という言葉があるこの国で、観光地や有名な話だけではない情報を聞き、知っているだけでも、その地に行った時に話す内容は増えていく。相手も、こちら側のことを知りたいと思う気持ちも生まれるかもしれない。近所付き合いがうまくいかないのは、どちらが悪いというわけではないだろう。コミュニケーションを取ることから良い近所付き合いは始まると私は思う

3.　課題

しかし、この提案を実現するに当たっていくつか問題が出てくる。

一つは、費用をどうするか。第二の生活空間として、もう一つ家を借りると考えると金銭的に気軽には利用できない。「共有できる家」は、半シェアハウスのようなもので、その家にかかる管理費は、利用者が平等に払うことになる。だが、シェアハウスのように常時利用者全員が住んでいるわけではないため、費用を割る人数はもっと多くなる。インターネットが普及している今、家を利用したいと思う人を探し、頭数を増やすことは簡単だ。

二つ目に、一つ目の

震災時には、他の離れた土地に住む知り合いが居れば一時的な避難や多くの手助けをしてもらえるだろう。

4.　まとめ

「地元仲間」という言葉がある。私の学校では、新入生が入ると懇親会を開く。その時はとりあえず「どこの住んでるの？」と聞く上級生が多い。このような場面は、社会でもよくあると思う。

地元の話はどんな人でも盛り上がるもので、同じ土地で生まれた人は、初対面でも少なからず親近感を覚える。それは、故郷の情景を思い出として、相手と共有し仲間意識を持っているからではないだろうか。故郷に縛られる必要はないが、意識だけでもその土地へ向けてあげることで、より多くのつながりや発見があるかもしれない。